安成通信　2016/04/30 ヨーロッパの春

オーストリア・ウィーン郊外にある国際研究機関 IIASA（国際応用システム分析研究所）での年 1 回の科学諮問委員会に出席してきました。地球研は IIASA と昨年春に包括的な研究協力協定を締結しています。この研究所については別の機会に改めて紹介することにして、今日は、ヨーロッパの春の特徴について 少し述べましょう。

この季節のウィーンはまさに春たけなわ、マロニエの白やピンク、紫の花が咲き乱れ、新緑も晴れた日には 輝くほどです。ヨーロッパの人たちは、長くて暗い冬が終わりを告げ、春が足早にやってくるこの時期を心待ちにしています。「春の喜び」、「春への賛歌」や「春への憧れ」を謳った歌曲や器楽曲はドイツ・オーストリアを中心としたクラシック音楽にもたくさんあります。日本も、3 月末からの桜の季節は、春を待ち望む気持として同じではないかと思われるかもしれませんが、ヨーロッパ中部のこれらの国々の「春」は、微妙に、いや大きく違うようです。

日本の春は、2 月から 3 月初めに、まず梅の開花で始まり、3 月末から 4 月の桜、そして 5 月の新緑と進み、 気候の季節進行もこの生物季節と対応しています。これに対し、中部ヨーロッパの春は、4 月末から 5 月に集中して、生物と気候の季節進行が同時に、しかも比較的短期間に急速に進みます。日本と中部ヨーロッパのこのような季節進行の違いの原因は、まず緯度にあります。日本は 30N～40N で、気温と日射（日照時間）の季節的な上昇の時期が微妙にずれていますが、ドイツ・オーストリアはより高緯度の 50N～60N に位置するため、気温も日射（日照時間）もほぼ同時に 4~5 月に急激に増加します。これにユーラシア大陸の西岸と東岸という地理的位置の違いが大気循環の季節的な変化にも大きな差を作り出しています。

このような気候的・生物的な季節の急激な進行を背景に、ヨーロッパには「春を待ち望む」風土と文化が形成されているようです。何はともあれ、春の強くなった日差しとマロニエの花の下で飲むビールやワインは、最高ですね。